

● IUPS2017 参加記

日本生理学会副理事長（国際化・集会担当）
生理学研究所神経機能素子研究部門 久保 義弘

The 38th World Congress of The International Union of Physiological Sciences (IUPS2017) が、2017年8月1日～5日に、リオ・デ・ジャネイロ（ブラジル）にて開催されました。その参加報告を記します。

総会

開催に先立ち、8月1日の午前、General Assembly（総会）が開催されました。日本からは、Delegate（代議員）として、石川義弘先生（横浜市立大学）、鯉淵典之先生（群馬大学）、久保、松岡達先生（福井大学）、関野祐子先生（東京大学）の5人が、また理事の御子柴克彦先生（理研BSI）が出席しました。

その中で、次期（2017年8月～2021年10月）の執行部および理事が決定しました。Denis Noble先生からバトンを受ける新しいプレジデントは、Julie Chan先生（台湾）です。より機動力を高めるために、各Commission（研究分野）のChair 8人、および地域枠の3人も理事に加わるようになりました。日本からは、御子柴先生がCommission 4（Neurobiology）のChairとして、引き続き理事となりました。また、新規に、久保がCommission 6（Molecular & Cellular Physiology）のChairとして理事を務めることになりました。日本の生理学および生理学者（注：日本生理学会と記さないのは、IUPSへの日本からのAdhering Bodyが、日本生理学会ではなく日本学術会議だからです）

とのパイプ役を果たすと共に、全体の発展のために建設的に貢献したいと考えています。

（新しい Executive members のリストはこちら）
<http://www.iups.org/about-us/executive-committee/>

（新しい Council members のリストはこちら）
<http://www.iups.org/about-us/council/>

今回の第39回IUPS2021は、中国の北京にて2021年10月15日～19日に開催されることが決定しています。その準備状況が報告されました。また、次々回である第40回IUPS2025の開催地がドイツのミュンヘン（2025年7月～8月頃）に決定しました。ドイツ生理学会、スカンジナビア生理学会、スイス生理学会、スペイン生理学会、オーストリア生理学会、スロベニア生理学会、およびヨーロッパ生理学会連合の合同提案によるものです。開催のための財源の確保が容易でなく、単独国開催が困難であることを示していると思います。今後のコンгрессの在り方について検討が必要なのかもしれません。

Board of General AssemblyのJayasree Sen Gupta先生（インド）とSusan Barman先生（米国）が中心となって、各国生理学会から集めた生理学と生理学会の状況と未来に関するアンケート結果を基に、“Physiology-Current Trends and Future Challenges”と題した文書を取りまとめました。後半には、井上隆司先生（福岡大学）が格調高い文章を寄稿されています。この内容に沿っ

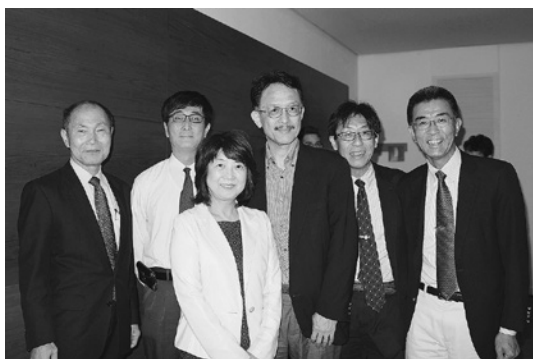


写真1. 総会に出席した日本のメンバー



写真2. 新旧の執行部、理事の集合写真

て、総会の後にパネルディスカッションが行われ、久保もパネラーとして参加しました。文書は、こちらからダウンロードしてご覧ください。

http://www.nips.ac.jp/biophys/Physiology-Current_Trends_and_Future_Challenges.pdf

IUPSとアメリカ生理学会刊行のReview誌“Physiology”に加え、新たにPeter Hunter先生(ニュージーランド)が中心となって、学術雑誌“Physiome”を刊行することになり、その概略が説明されました。

コンGRES運営全般

学会会場は、リオ・オリンピック2016のために開発された市の西のはずれのRio Centroと呼ばれる場所にありました。ごみごみしていない、治安の問題のないエリアでしたが、周りにあまり何も無いところでした。オリンピックの跡地が有効利用されていない点が寂しい感じでした。

大会開始直前の参加者数はコンGRES開始時点で1,479名(最終的には1,500名を少し超えました)で、内訳は、ブラジル815、米国107、英国83、チリ51、中国39、カナダ31、ナイジェリア29、日本26、ドイツ22等々でした。ナイジェリアの参加者数が多いのは、アウトリーチ活動の賜物です。全体としては、参加者が多いとはいえ、厳しいものだったようです。

今回、ブラジル生理学会に加え、英国、米国、スカンジナビアの生理学会が共催として、Lecturerや、ラベルをつけたシンポジウムの講演者の旅費を負担しました。これらの財政は、開催国ブラジルの会計の外という形になっています。結果としては、この方策が財政困難を乗り切り、学術レベルを高く保つことに貢献したと思います。

空調が効きすぎて寒く、また、空調の雑音が大きすぎて講演が聞き取りづらい会場が多々ありました。映像と音声もしっかりしていることは重要なポイントだと思いました。

開会式の後、歌と演奏のイベントは行われたものの、レセプションパーティー等は一切ありませんでした。また、ランチョンセミナー等の食事の提供もありませんでした。すっきりしていて、これはこれで良いのかもしれないと思いました。また、会場においてWiFiのサービスが無く、この点は通常の国際学会のスタンダードとは異なる感じでした。総じて、ブラジルの景気が低迷し財務的に厳しい中、なんとか開催を成し遂げたといった感があり、Local Organizing Committeeの大変な苦勞がうかがわれました。Vagner Antunes先生、Benedito Machado先生等、開催に尽力され

た方々に、心より感謝しています。

学術プログラム

コンGRES全体のテーマは、“Rhythms of Life”でした。日本からは、Plenary Lecturerとして、宮下保司先生(東京大学)が「認知記憶システム」に関するご講演をされました。また、Special Lecturerとして、御子柴先生が「IP₃受容体とCa²⁺動態」に関するご講演を、柳沢正史先生(筑波大学)が「睡眠と覚醒」に関するご講演をされました。いずれも聴衆をひきつける素晴らしいご講演で、日本の生理学のプレゼンスを存分に示すことができてよかったと思いました。

今回のPlenary Lectureは、宮下先生の他、Denis Noble先生(英国)の「Physiologyの復権」、Ada Yonath先生(イスラエル)の「リボゾームの構造生物学」、Daniel Martin先生(英国)の「極高地の生理学」、Roger Kornberg先生(米国)の「転写の分子メカニズム」等々、非常に幅広くかつ厳選されたものでした。ここまでが生理学と限定するのではなく、生命機能のメカニズムの理解を目指す学問はすべて生理学というメッセージを感じました。

英国、米国、スカンジナビアの生理学会が共催として、ラベルをつけたシンポジウムを多数企画しました。しかし、お金で枠を買った国がやりたい放題だったという感じは無く、世界全体のコンGRESであることを充分意識しつつ、興味深いテーマの優れたシンポジウムが実施され、結果として、学術レベルの向上に大いに貢献したと思います。ただ、旅費支援を与えた学会等の組織ごとに支援額が異なり、シンポジウム講演者間で待遇に問題があった点は問題だという指摘が事後にありました。また、南米の講演者の割合が通常より多かったことは確かですが、久々の南米開催ということを考慮すると、個人的には常識の範囲だったと思います。

日本からは、関野先生、白尾智明先生(群馬大学)が企画、講演されたシンポジウム、松岡先生が講演されたシンポジウム、鬼丸洋先生(昭和大学)が講演されたシンポジウム、大久保洋平先生(東京大学)が講演されたシンポジウム等がありました。久保も、Journal of Physiology誌のサポートを得た「イオンチャネル・受容体のゲート機構」に関するシンポジウムを企画し、また講演をさせていただきます。

ポスター会場は、背中と背中の中のスペースがややタイトだったものの、幅は十分で、また隣のポスターとの間に少し仕切りがあったのもよかつ



写真3. Plenary Lecture 壇上の宮下保司先生

たと思います。閉会式で、Denis Noble 先生が Lecture 等よりも（たくさんの若い研究者が発表する）ポスターセッションにこそ生理学の未来があり、自分はそれを大いに楽しんだとおっしゃったことが印象的でした。

総じて、プログラムは非常に充実していたと思います。

Education 関連のサテライトワークショップ

リオでのコンGRESSに続いて、サンパウロで Education 関連のサテライトワークショップが開催され、鯉淵先生が出席されました。大会の参加者 1,500 名のほぼ 1 割にあたる約 150 名もの参加者があり、大変盛会だったそうです。Education 関連の活動は、様々な国において広く切実に重要であるため IUPS の諸活動の中でも、特に盛んなようです。

リオの街

北のはずれにある空港から西のはずれにある会場近くのホテルまでの 2 時間以上の距離を、BRT と呼ばれる、線路の無い路面電車のような、道路の真ん中を走るバスを乗り継いで行きました。車窓から見る北のはずれの市街地には、絵に描いた



写真4. コルコバードの丘からの眺め

ような低所得者層の住居地区が続いていました。オリンピックの前、TV でひたくり事件の現場が多々放送されていましたが、こういう地区だったのかなと思いました。絶対に下車したくない感じでした。帰路も BRT バスを利用したのですが、その地区において渋滞でバスが進まなくなった時に、バス内で乗客と運転手が大声でどなり合いのけんかを始めた時には、どうなることかと思いました。

BRT バス内で乗り換え場所を調べるため地図を見ていたら、英語を全く話せなくても、また、必ずしも路線を良く知っているわけでもないのに、困っているみたいだからと、いろんな人が寄って来て声をかけてくれました。ブラジルの人たち、気さくで親切だなと思いました。

一晩は、ブラジル名物のシュラスコを楽しみにでかけました。いろんな種類のお肉を、いくらでもサーブしてもらえるという、肉好きには夢のような食事でした。また行きたいです。

空き時間に、Rio の名所といえばここという、両手を上げた大きなキリストの像が立つコルコバードの丘に行ってきました。期待を裏切らない、まさに絶景でした。

旅程が長くて、時差も 12 時間あり大変だったなあ。でも、たくさんの方々とお会いしてお話することができて、充実した楽しい時間だったなあ、自分の人生において南米を訪れることはまたあるのかなあとおいつつ、リオを後にしました。